

デジタル時代は風度を武器に(2)

作家 童門冬二

関白の嫌った一番槍

戦国時代に、
「若いけれど人使いがうまい」
といわれた蒲生氏郷にはこんな話もある。この時代の武士の勲功は何といても合戦での武功だ。中でも“一番槍”が重くみられる。このことは前号に書いた。

蒲生家でこの一番槍で名をあげていたのが西村(にしむら)という武士である。氏郷も西村のおかげで蒲生家の名を高めていたのだ。だから西村の戦績は内緒の面もあった。いわゆる“公然たるひみつ”だ。

これが豊臣秀吉が関白になった時にバレた。秀吉は農民の出身だ。誰がみても出世を急いでいる。それも、

“自分さえエラくなればいい。そのためには他人を押しつけてもいい”

という考えの実行者に思える。ところが意外とかれは、

「仕事は個人でやるものではない。共同でやるものだ。そのためにはチームワークが必要だ」という説の主張者なのだ。

かれのエピソードの「清州城の堀(へい)修理」や「長短ヤリの試合」などは、いずれも“個人技(わざ)”ではなく、チームワークによる共同作業の成果を示している。

関白になった時、全国の大名に私戦を禁じた。

そして「この私戦禁止は天皇の命によるもので、関白が代行するものである」

と宣言し、

「特に一番槍を禁ずる」と命じた。

蒲生氏郷を呼び、

「西村にこのことを伝えよ。そむいたら懲罰に処す」と念を押した。氏郷はやむをえず西村にこのことを伝えた。

ところが西村は、

(こんな命令はいつも形式さ)

とタカをくくって無視した。そして九州の戦い(相手は島津氏)の時に“一番槍”の手柄を立てた。味方は激賞したが、秀吉は激怒した。

「オレの命令にそむくのは、天皇の命にそむいたのと同じだ。

といて氏郷に西村の懲罰を命じた。こうなつては氏郷もかばいようがない。

「しばらく浪人しろ。時をみて再雇用するから」

となだめて解雇した。

かわらぬ主従の風度

数年たった。家老がいった。

「殿(氏郷)、そろそろ西村を呼びかえしては？」

氏郷もその気になっていたので西村を呼びかえた。二人はスモウが好きだ。よく勝負した。いつも西村が勝った。氏郷にすればくやしくて仕方がない。

いまは数年の浪人で体力がおとろえている。
(これなら勝てるぞ)
氏郷はホクソえんだ。
「行くぞ！」
庭に描かれた円型の土俵でおそいかかった。が、
かんたんに投げ出された。氏郷は、「もう一番！」
と呼ぶ。家老が西村にそっとささやく。
「こんどは負ける。勝つと再就職がダメになるぞ」
西村はうなづく。が、うなずいただけですぐ氏郷を投げとばした。家老はガッカリした。
「このバカ、ガンコ者め！」
氏郷が西村を呼んだ。
「おい、浪人してもよく武士の充分を忘れなかったな？」
「あなたのことをいつも思い出しておりましたので」
「わかった。むかしどおりはげめ」
「承知しました。ありがとうございます」
このケースにはむずかしい問題が含まれている。実績を競うことなくすべてパラレル（平等に仕事が可能なのか）ということだ。
小学校の運動会の百メートル競走で、
「全員一等賞！」
にするようなものだ。まして合戦は生きるか死ぬかの争いだ。秀吉のチームワーク重視もわかるが、氏郷の「一番槍是認」も、集団への刺激剤としては、必ずしも効果がないとはいえない。

「どうしますか？（一番槍）」
西村がきく。氏郷は答える。「かまわぬ。やれ。オレが承認する」
みたいな“黙認”だったと思う。
これもリーダーも“風度”なのだ。
部下が上司から感ずる仕事へのモチベーション（動機づけ）多くは、“情感”だと思う。西村が感じたのもそれだ。
「主人は少しも変っていない。むかしどおりの性格だ。オレを一時浪人させたのも関白の命令でやむをえなかったのだ。
その証に、二度もスモウで投げとばしたのに、オレを再雇用してくれた。
それを家老のいうようにワザと負けたら、浪人して武士の魂がイヤしくなったのか！クビだ」
と逆に追い出される。投げとばしてよかったのだと思う。
このへんは、氏郷と西村との、
「よく知りつくした主従の人間関係」
であって、微妙なディティールだ。デジタル社会からは出てこないかもしれない。
大概「徳（とく）」などという理屈ではない産物は、コンピュータやAIの生産製品ではない。
だからといってどんどん場所を拡げつつあるデジタル社会やAIの登場を軽視はできない。
「人間が人間らしさを残せる武器は“風度”だけだ」
と考えるのである。